

生^き真^ま面^じ目^めな秘書は愛でられる

目次

生真面目な秘書は愛でられる

5

番外編 比翼の鳥

247

生^き真^ま面^じ目^めな秘書は愛でられる

第一章 足下から鳥が立つ

人は誰しも何かしらのコンプレックスを抱えている。

たとえ傍目からは恵まれているように見える人でも、大なり小なり抱えているものがあるのだ。

牧瀬燕は、上場を目指す新興の会社で秘書として働く二十六歳のOLだ。優秀とまではいかなかったが、秘書としてそれなりに役に立っている自負がある。

常に清潔感のある服のコーディネートを心がけているし、髪型も大企業の役員に受けがよさそうな大人しいものを選んでいいる。そこそこ有能に見えて、傍から見れば劣等感などないように思えるかもしれない。

そんな彼女にも、もちろんコンプレックスは存在した。

まず背が高いこと。

百六十七センチの燕は、三センチ以上のヒールを履けば百七十を超え、ほとんどの男性と頭の位置が変わらなくなる。

思えば、人に頼られることが多いのは、この長身のためかもしれない。

そのこと自体は問題ないし、職場では褒められることが多いけれど、燕は逆に人に頼ることが苦手になってしまった。

そのせいか、学生のとくに付き合っていた恋人たちのほとんどには、「可愛げがない」と言われ振られ続けてきたのだ。

自分の性格は嫌いではないが、たまにもっと身長が低い可愛らしい外見ならば、甘え上手になれたのでは、と考えることがある。

そして、他にも気になっていることがもう一つ。

燕の身体には、ある事故で負った大きな傷痕があった。それはある意味、名誉の負傷と呼ぶべきものだし、見えにくい場所にあるので、普段は意識することはない。

ただ、それが原因で付き合っていた人と別れたことがある燕は、男性と親しくなると、途端に引け目に感じるようになっていた。

そのため、ここ数年、恋愛に積極的になれずにいる。

「……はあ」

ファイルを自分の机の上に置いて、燕は項垂れる。

普段は仕事にこんな私的なことを考えることも、ましてや、それで落ち込むこともない。けれど、今日は珍しくしょんぼりすることを自分に許した。

今朝、彼女が懂れていた課長の鴨井が、社内に結婚を報告したのだ。

彼は燕がヒールを履いても頭一つ分ほど背が高く、がたいのいい人。それだけで、好意を持つつ

に充分だ。その上、女つ気がなく性的な匂いを感じさせないところも好きだった。

「自分は女性に縁がないから、一生結婚しない」と言っていたのに……。鴨井は彼と同期の可愛らしい女性と結婚した。

年下の燕から見ても女性的で守ってあげたくなるような人と――

意味もないのに、思わずその女性と自分を比べてしまう。

自分の欠点が頭に過るよぎるのは、気持ちが悪く後ろ向きな証拠だ。

仕事に集中しなければと燕は首を振りながら、顔を上げた。そこに、突然声をかけられる。

「牧瀬」

「っ、はい」

一瞬間があいたせいで、相手が怪訝けげんな顔になる。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

声をかけてきたのは、彼女が秘書をしている鳳辰巳おむらたつみだった。燕は慌てて背筋を伸ばす。

辰巳は三十一歳という若さながら副社長を務め、会社を支えている人だ。

この会社は起業してから数年ほどしか経っていないため、社員の年齢は比較的若い。とはいえ、百人ほどいる社員の中で、二十代で役職者になった辰巳は特別だろう。

なんでも彼は、社長の森田もわたが起業するさいにかなり手を貸したということだ。森田は常に「辰巳がいなければ会社を興おこすことも、軌道に乗せることもできなかった」と言っている。

そういう事情なので、若い副社長に反発する人間は社内にはいない。

辰巳のほうは、当初、副社長就任を断ったそうだが、恩人である森田にどうしても頼まれ、仕方なく承諾したという話も聞いている。

辰巳にとつて、森田がどんな恩人なのか、燕には詳しいことはわからない。

知っているのは、辰巳が一度「森田さんは俺の分岐点にいた人」と飲み会で言ったことだけだ。

燕が辰巳付きの秘書になってもう四年も経つが、実は彼のことをよく知らない。

プライベートをあまり見せない人だし、無表情で感情がわかりにくいのだ。

彼が笑ったところを、燕は数える程度しか見たことがなかった。

その辰巳が燕の机に近づきながら、用件を話す。

「森田さんが、今日の予定をメールしてくれと言っていた。――それと、体調が悪いならさっさと帰ったほうがいい」

「大丈夫です」

「……そうか」

燕は辰巳の姿を改めてまじまじと見た。

仏頂面ぶつどうめんのせいで、燕も含め女性社員から遠巻きにされているが、実は彼の顔立ちはとても整っている。きっちりとした後ろに撫なで付けているその艶やかな黒髪を乱れさせたいと思う女性は、少なくともはいはずだ。

しかも、ジムに通っているらしく、綺麗な筋肉がついている。身長はヒールを履いた燕よりも高

いので百八十ぐらいはあるだろう。

身長が高いというだけでも、燕には魅力的に思える。

役職は副社長で、仕事も速く正確。他人に厳しいがそれ以上に自分に厳しく、率先して仕事をこなす。他の社員が帰るなか、一人パソコンをにらんでいる姿を燕は何度も見ていた。

夜、コーヒーの差し入れをする彼女に「夜は危ないから、早く帰れ」とぶつきらばうだけれど優しい言葉をかけるくらいのは気遣いもある。

燕には好物件すぎるので自分が彼と、と考えたことはないのだが、これほどの男性が独身で、かつ決まった女性がいないというのは不思議だった。

もつとも隠すのがうまいだけかもしれないが。

ぼんやりと観察している間に辰巳は自身のデスクに戻っていった。

燕は急いで自分のパソコンに向き直り、メールソフトを立ち上げる。そして今日の予定を森田へ送った。

燕は辰巳の秘書だが、今日は社長専属秘書である上司が休みのため、代わりに予定の連絡をしたのだ。

辰巳にも同じようにメールで今日の予定を送った後、夕方にある会議の資料にヌケはないか、データを確認する。

そうして三十分ほど集中し、一段落ついた燕は仕事の手を止めた。身体をぐっと伸ばすと、デスクの端に缶の紅茶が置いてあることに気づく。

こんなふうに黙って置いていくのは一人しかいない。辰巳だ。

視線を向けるが、彼は忙しそうにパソコンの画面に目を走らせていた。

燕は彼が見ていないとわかっていながらも紅茶を手に取り、頭を小さく下げる。彼のちよつとした気遣いはいつものことだが、気持ちが悪落ちていた今日は特に心が温まった。

少し温ぬかくなってきている紅茶を一口飲み、仕事を再開する。

この会社の主な業務は、個人を対象とした電化製品のリースだ。

長期出張や単身赴任の人、短期間一人暮らしをする人たちなどを対象に冷蔵庫、テレビ、洗濯機や掃除機といったあらゆる電化製品を貸しだしていた。その他、小型のビデオカメラやスマートフォンも揃っているし、お客に頼まれれば会社に用意がないものも調達してくる。

今、準備に追われている夕方の会議では、先月の売り上げを確認し、顧客からの要望やクレームの報告、検討をする。出席者は社長と副社長、そして各部署の代表だ。

資料の作成は各部署で行うが、そのデータをまとめたり、会議室の準備をしたりするのは燕の仕事だった。

もともとは他部署の事務員にも手伝わってもらっていたが、忙しい彼らを煩わづらわせるのが嫌で、いつしか一人で準備するようになっていた。

今日も会議室で準備をしていると、総務部所属で燕の友人である岩瀬加里いわせかりが入ってきた。彼女は印刷された資料の束を燕に手渡す。

「はい、今日の会議の資料」

「ありがとう」

燕が受け取った資料を確認していると、加里がにつこり笑って話しかけてきた。

「今日は行く？」

「——行くつもり」

燕は終業後の予定を頭の中で確認する。「行く」とはジムのことで、二人は同じスポーツジムに通っているのだ。

「なら、定時過ぎにでも迎えに行くよ」

「ん、了解」

ひらひらと手を振って会議室を出ていく加里を見送った後、燕は資料を各席へ丁寧に置いていく。落ち込んだ気分の日だったが、友人との予定ができて気持ちが浮上してきた。

会議が無事終わり、定時を五分ほど過ぎたころ。燕は辰巳に声をかけられた。

「牧瀬。……少しいいか？」

普段はつきりとものを言う彼には珍しく、歯切れが悪い。燕は首をかしげながら、返事をした。

「はい、なん——」

「燕？ 帰れる？」

ところが、途中で加里が迎えに来てしまう。

燕は加里に「少しだけ待って」と伝えようとしたが、その前に辰巳に遮られた。

「いや、いい。……また後日で問題ない。気をつけて帰ってくれ」

なんの話か気になるものの、辰巳がいいと言っているのをさらに尋ねるのもどうかと思い、燕は席を立つことにした。

「わかりました、ありがとうございます。……鳳さんも、金曜日なんですからあまり遅くまで仕事をせずに帰ってくださいね」

「ああ、わかってるよ。お疲れ様」

「お疲れ様でした」

丁寧にお辞儀をした後、ジャケットを羽織はって、加里のもとへ駆け寄った。加里は少し気遣わしげな表情になっている。

「ごめん。話、大丈夫だったの？」

「うん。なんか、後日でいいって言ってたから」

「そっか。なら、ジムで身体を動かす前に、ご飯にしよう！」

二人で話をしながら駅に向かう。

燕たちが働いている会社は、複数の企業が入った大型タワービルの一角にある。そのビルから近い、路地裏にある焼き鳥専門店に入った。さまざまな焼き鳥があるので、燕と加里が気に入っているお店だ。お酒の種類も多く、店内もシンプルで居心地がいい。

席に通されると、いつも頼んでいるメニューをさっそく注文した。

「焼き鳥塩の盛り合わせと大根サラダ」

「あと、煮卵とささみのわさびのせもください」

「わさびのせ美味しいよねえ」

「絶品だよね」

この後、ジムに行くのでお酒は飲まずにお茶で軽く乾杯をする。

「ねえ、告白しなくてよかったの？」

すぐに加里が燕を見つめながら問うてきた。今日、わざわざ誘いにきたのは、この話をするためだったようだ。

「誰に？」

「鴨井さんにだよ。燕、ずっと憧れてたじゃない。玉碎まくだいするにしても、告白しておけばよかったのに。気持ちに踏ん切りがつくから」

燕は食べていた焼き鳥の串を指でいじりながら、鴨井と結婚するという可愛らしい先輩の姿を思い浮かべる。

「自分のために告白なんてしないよ。私は楽になるけど、鴨井さんは面倒くさいでしょ？ 自分がされたら嫌だからしない」

「んー……」

「それに、私の想いはちよつとした生活のスパイスだけで、それ以上ではなかったから」
もともと鴨井と付き合いたいとは思っていなかった。

仄ほかな好意は、スパイス——日常への刺激。

鴨井にとつては失礼な話だが、燕にとつて彼は安全なちよつとした刺激だったのだ。

相手が振り向くことがないとわかってる恋は楽だ。頑張る必要がないのだから。

「ならいいけど……。確かに私的にも、燕の相手は鴨井さんより鳳さんのほうがしっくりくるって
いうか、バランスがいいというか、うまいこといきそうな予感がするんだよね」

「はあ？ 私と鳳さんが？」

突然の加里の言葉に驚いた燕は、飲んでいたお茶を噴きだしそうになった。

仏頂面ぶつどうめんでパソコンとにらみ合う辰巳の姿が頭に浮かぶ。

だが、そんな彼と自分が恋愛するという発想はなかった。そんなことを考えるだけで、おこがましい。

燕は加里が何か勘違いをしているのだろうと、その誤解を解こうとする。

「鳳さんってさ、怖い顔していることが多いけれど実は優しい人だし、笑っていればかっこいいのよ」

「そうそう。もったいない人だよね」

「だからさ、そんなかっこいい人が私とどうこうって……ないと思うわ。うん、ない」

そう言うと、加里は不満げな顔をした。

「断言しないでよー、燕は頼りになって素敵なんだから！ それに鳳さんって、燕に対してだけは
当たりが柔らかいのよ。他の人よりも気にかけている感じがするんだよね」

「えー、そんなことないって」

自分を卑下するわけではないが、女性的な魅力に欠けることはわかっている。そもそも、「頼りになる」は女性の長所ではないだろう。

とにかく辰巳が自分を好きになるなど分不相応なことは、考えられない。

「じゃあさ、鳳さんが燕をどう思っているかは置いておいて、燕はどうなの？」

「どうも何もないって……。私みたいな女が好きになったら迷惑かけるだけだし、秘書なので、その辺りはちゃんと線引きしますー」

「それって、彼の秘書じゃなかったら好きになってたってこと？」

「……もう、この話はここまで！ 終わり終わり」

なかなか引き下がらない加里に、燕はひらひらと手を振って話を止めた。お茶を一気飲みして一息つく。

幸い、加里はそれ以上しつこくすることはなく、二人は食事を終えてジムへ向かうことになった。ロッカールームで着替えながら、加里が燕を見上げる。

「もしかして燕、また少し伸びた？」

「……何か言った？」

燕はにっこりと笑ってみせる。すると、加里は何も言わなかったという顔で自分の着替えに集中した。

彼女に悪気はなかっただろうが、今日とはことんコンプレックスを刺激される日だ。

成長期などとうに過ぎ去っているのに、いまだに伸びる背が憎たらしい。

モデルのようで羨ましいと同姓からは言われるが、嬉しいと感じたことなどなかった。ただ、それを隠そうとして猫背になるのはかっこう悪いので開き直るようになっている。

少しして、着替えを先に終えた加里が燕を見て呟いた。

「そっちは、結構薄くなったね」

「ああ、これ？ あれからもう五年ぐらい経つからね」

燕の腰の下には大きめの傷が一筋存在していた。そこだけ少し色が濃くなっていく程度で生々しいものではないが、他人が初めて見れば多少なりとも驚くぐらいではある。

燕はその傷にそっと触れた。

「その男の子からまだ連絡きてるの？」

「そうなの！ 毎年必ず一回は手紙をくれるんだよ。近況を教えてくれるんだけど、気持ちは親戚のおばちゃんってところかな」

思わず出た明るい声に、加里は笑う。

「もう少しお互いの年齢が近かったら、運命の出会い的な感じなのね」

「さすがにそれは無理があるよ。高校生と付き合ったりしたら捕まるわ」

燕も着替えを済ませ、笑いながら互いのトレーニンングに向かった。

この傷を負ったのは彼女が大学三年生のときだ。

バイトに行く途中、大きな公園の前を通りかかった燕は、中で小学生ぐらいの子どもたちが遊んでいるのを見かけた。そこへ出入り口からボールが転がりでてきたのだ。それを追いかけてきた男

の子に車が突っ込んでいくのを見た彼女は、咄嗟とつさに持っていた鞆たもとを放り投げ、子どもに向かって走りだしていた。

子どもを抱きしめ、地面に転がる。車が急ブレーキをかけた音がやけに大きく響き、続いて叫び声が耳に届いた。

けれど、心臓がばくばくと鳴っていて、周囲の音があまりよく聞こえない。

目をぎゅうつと瞑つむりながら子どもを抱き込んでいた燕は、しばらくして肩を叩かれる感触に気づき、ゆっくりと目を開いた。

逆光でよく見えないが、燕の肩を叩いているのは男性らしい。

「大丈夫か？」

「た、ぶん……」

「今、救急車を呼んでもらったから動かないように」

意識がゆらゆらとして定まらない。腕の中にいたはずの子どもは、いつの間にかいなくなっている。

「男の子は無事だ。擦り傷を負ったぐらいで今は友達と一緒にいる。それより君のほうが重傷だ」

「よかった」

「よくはないな。壊れていたフェンスが刺さって、出血している。タオルで押さえているが、セクハラなんて叫んでくれるなよ」

「叫びませんよ……。この程度でセクハラとか、女王様か何かですか……」

朦朧もうちゅうとしてきた意識をどうにか保つため燕が冗談を言うと、男性が小さく笑う気配がした。

「それなら俺は女王様を助ける騎士だな」

しばらくして救急車の音が聞こえた。

救急隊員にどうにか名前と家族の連絡先を告げたところで、燕は意識を失った。気がついたのは、病院のベッドの上だ。

目を覚ましたとき、目の前には大泣きしている母と妹、そして目を赤くしている兄がいた。

燕に声をかけてくれたあの人は、一緒に救急車に乗ってくれたが、家族が来たのを確認すると帰ってしまったという。手当てをしてもらったお礼を言いたかったが、名前も連絡先も告げなかったそうだ。

そうして、燕は腰に大きな傷を負った。

けれど、後悔はしていない。

あのとき助けた男の子は、すぐに両親と一緒に見舞いに来たし、毎年必ず近況の手紙を書いてくれるようになっていた。今どきメールで済むようなことなのに、わざわざ手紙だ。親から言われてしぶしぶだとしても、高校生になった今でも手紙を書いてくれるその気持ちが嬉しい。

だから、この傷は燕にとって勲章だ。

それに五年も経った今では薄くなり、ぱつと見、隠そうと思えば隠せる。

ただ、誰かと恋愛関係になって、その傷を見せる勇氣だけが今のところない。

燕はため息をつくど雑念を追い払い、その後、黙々とトレーニングを続けた。

トレーニングを終え、ジムで加里と別れた燕は自宅マンションに向かっていた。

夜も更けた時間だが、金曜日だからか電車もマンションの最寄り駅も人が多く行き交っている。駅から徒歩十分ほどの自宅マンションにつくと、エントランスで郵便物を確認した。タイミングよくあの男の子から手紙が届いている。

部屋に戻った燕は部屋着に着替え温かいハーブティーを片手に、さっそく手紙を開いた。

高校生らしい少しいびつな字だが、小学生のころよりも成長している。感慨深く、思わず微笑した。

どうやら最近彼女ができたようで、初めての彼女にどう接すればいいのかわからない、と書かれている。高校生らしい悩みだ。

妹はいるが弟はいない燕は、彼を年の離れた弟のように思っていたので、姉として頼られているようで嬉しい。

引き出しからシンプルなレターセットと万年筆を取り出すと、悩める青年に「恥ずかしいかもしれないけど、優しくしてあげてください。照れてばかりだと、彼女が苦しくなって離れていくからまわりに冷やかされても、一番大事なのは何か自分で決めて実行するべきだよ」と丁寧に綴る。

そうしてインクが乾くのを待ちながら、どさつと大の字になって寝転がった。

彼の悩み相談に乗る前に、自分のことをどうにかしなければ。

一生独身だと宣言していた憧れの鳴井は結婚してしまう。

自分もそろそろいい年だが、一人で生きていくと言い切るほどの覚悟はできていない。そのくせ、率先して婚活したりもしていなかった。

だって、誰かの隣で笑っている自分なんて想像できない。

「あー、恋愛面倒くさい。なんかこう、さくさくつと付き合っつと結婚して、さくさくつと生きていきたい……」

それが一番難しいのだとわかっている。

いっそのこと親か親戚に頼んで誰か紹介してもらおうか。

けれど、それでうまくいったら今度はその人たちの顔を立てなければならぬし、気乗りしない相手でも場合によっては断れないかもしれない。

それにやっぱり、どんな人なら自分を選んでくれるのか、わからなかった。

「人生イージーモードだったらしいのに」

ぐずぐずし始めた思考に飽きて、燕はベッドに潜り込む。

こういときは、寝てしまふに限る。悩みすぎれば気持ち腐ってしまう。

燕はそろそろ自分も恋愛に積極的にならなければいけないのかなと、考えながら眠りについた。

月曜日。会社に出社した燕は、辰巳に声をかけた。

先週の金曜日、彼が話しかけてきたことが気になっていたので。

「鳳さん、おはようございます。金曜に何か言いかけていらっしやいましたが、私にご用でした？」

すると辰巳が眉間に皺を寄せて、普段よりいつそう難しい顔をする。

「ああ、少し話しくいんだが……」

その言葉に燕は、重大なミスを犯しているのかと不安になり、身体を硬くした。

辰巳は言いくそうに口を開閉させて、また黙ってしまう。それほどまでの何かをってしまったらしい。

燕が死刑宣告を待つ罪人のような気持ちになった、そのとき、ノックの音がして、森田が部屋に入ってきた。

「二人共、怖い顔してどうしたの？」

森田をぼつと見た燕は、社長である彼への対応を優先させる。

「おはようございます、社長。本日はどうなさいました？」

森田は特に用事もなかったらしく、呑気な態度で口を尖らせた。

「もー、何度も言うけど俺のことは森田って呼ぼうよー」

「大の大人が語尾を伸ばしても可愛くないです。社外で社長を名字で呼んでしまうと問題があるので、私は社長で貫き通します」

「牧瀬らしいな」

会話を聞いていた辰巳が、口の端を上げ、先ほどとは打って変わった穏やかな口調で言う。

社内では役職者でも苗字で呼ぶのが社長の方針のだが、燕は頑なに森田を社長と呼んでいた。

それに対して森田は愚痴を言うものの、結局は許してくれている。

「それで？ 今にも死にそうな顔で何話してたの？」

森田の問いに、辰巳は再び顔をしかめた。

「いや、たいしたことではないです。気にしないでください」

「いやいや、気になる気になる！ 辰巳がそんな顔するの珍しいし……。はっ！ わかった」

森田がわざとらしい表情で、両手で口元を覆う。

彼は面白がっているみたいなので、仕事での失態ではないかもしれないが、もしかしたら社長に話が行くような大きな問題なのかと、燕は不安になった。

森田が口を開く。

「告白っ！」

大きな声で告げられたその言葉に、燕と辰巳は無言で森田をにらんだ。

「当たり前でしょ？ だけど、やっぱりTPOってあるからさあ、辰巳はもう少し乙女心とかを考えたいほうがいいと思うんだよー」

そんな二人の様子に構わず、森田は何度も頷きながら話を進めていく。

「まあでも、お似合いだね。二人が結婚までいったら……スピーチ考えなきゃ！」

彼は何を考えているのだろうか、燕はため息をついた。

燕が辰巳に似つかわしくなく、可愛らしくもない背の高い女を誰が好きになるというのか。

「社長、いい加減にしてください。セクハラです」

「え!? これでセクハラになるの!?」
「なりませんよ」

燕は眉間に寄った皺をぐりぐりと押しつけて伸ばす。辰巳も言い返せばいいのと思いい、視線を向けた。

けれど彼は、顎に手を添えながら何かを真剣に考えている。

燕は、黙り込んでしまった辰巳に声をかけた。

「鳳さん？」

「すまん。少し考え事をしていた」

燕の声に、辰巳が顔を上げる。すると森田がにやにやと笑いながらからかってくる。

「辰巳ってば、アレだろ。牧瀬ちゃんとの新婚生活とか妄想してたんだろー」

「森田さん」

「な、何？」

辰巳の声色がワントーン低くなっている。怒っているらしいことに気づいたのか、さすがの森田も少し身構えた。

燕はそれをありがたいと感じる。恋愛話はやはり、どうにも苦手だ。

森田に鋭い視線を向けながら辰巳が答える。

「森田さん。先週、目を通してほしいと頼んでいた書類は確認してもらえましたか？」
すると森田が目を泳がせる。

「……あーっと、そういえばコンビニにカフェラテを買いに行こうと思ってたんだ。二人共何か飲みたいのがある？」

「社長。カフェラテなら機械があるので、そちらでどうぞ」

逃げようとする森田を捕まえて、燕は彼を社長室へ押しこんだ。

「鳳さん、すぐに書類目を通してもらいますので」

「よろしく頼む」

辰巳は小さくため息をついていた。

また、話を聞く機会を逃した。本当に彼は何を伝えたかったのだろうか。

森田が書類の確認を始めたのを見届けてから、副社長室へ戻る。

カッソカッソとヒールを鳴らして辰巳のデスクへ向かった。

「牧瀬？」

「もし私に何か不手際があったのなら、遠慮なくおっしゃってください」

「……いったいどうした？」

「先ほど言いかけていらしたことです。はっきりさせていただかないと、気になって――」

そう言うと、辰巳はばつの悪そうな顔をした。

「……ああ、そういうことか。……こっちにきてくれ」

彼は燕を会議室へ促す。それほどまでに重要なことらしい。

燕はごくりと唾を呑んだ。

「まず、誤解を解かせてくれ。君に不手際は無いし、いつも頼りにしている。今回は俺の個人的なこと——言ってしまうばプライベートのことで……」

「……プライベート、ですか？」

「ああ、実は——」

そのとき、辰巳のポケットに入っていたスマホが鳴り響いた。彼は燕に断って電話に出ると厳しい顔つきになる。どうやら、緊急のトラブルが発生したようだ。

結局、それ以降も何だかんだと忙しく話ができず、うやむやのまま週末になっていた。

もやもやした感情を残して迎えた土曜日。

燕は朝から洗濯などの家事を片付け、読みかけの小説を読んでいた。

残り三分の一というところまで来てから、机の上に置きっぱなしになっているレンタルDVDの袋が目に入る。

「……あれ？ これいつまでだっけ」

袋を開けて中に入っている期限が印字されたレシートを確認する。

「今日まで……！ 行かないや」

強制的に家を出る用事ができてしまった。せつかくなので、レンタルショップに行った帰りに、カフェに寄って小説の続きを読むとしよう。

燕はクロゼットを開いて洋服を物色する。

「な、に、を、き、よ、う、か、な」

会社ではパンツスーツを愛用している。加里を始め、女性陣にはとても評判がいいが、実は柔らかいワンピースが好きなのだ。

ズラッと並んだまだ新しいワンピースを指で一つ一つさしながら、どれを着ようかを選ぶ。

ネイビーの地に白い花が咲いた膝丈のラップワンピースを、鏡の前で身体に当てた。

このワンピースは風に煽られると、ひらひらと裾が揺れるのが可愛くてお気に入りだ。鼻歌を歌いながら、踵にレースの装飾が施されている黒いパンプスを靴箱から出した。

こんなガーリーな格好、会社の人間には見せられないなと苦笑しつつも化粧を施し、最後にコーラルオレンジのリップを塗る。普段口紅はベージュ系のものしか選ばないが、この派手すぎない綺麗な色味が好きなのだ。

外に出ると陽射しが柔らかく、暖かな陽気が身体を包み込んでくれる。

機嫌よくDVDを返して店を出た瞬間、スマホがブーブーツと震えた。

「わっ、びつくりした。……鳳さん？」

画面には、鳳辰巳の文字が表示されている。

休日に電話をかけてくるなんて珍しい。一、二度、緊急の用事を頼まれたことはあるが、基本的に休日は休めと常々言われている。

燕は首をかしげながら、電話に出た。

「はい、牧瀬です。鳳さん？ どうしたんですか？」

『牧瀬、悪いんだが今から言う場所に、すぐ来れるか？』

辰巳はどこか切羽詰まった声で、言った。

「今から、ですか？」

燕は眉間に皺を寄せる。

『ああ、あまり時間がなくて説明ができない。緊急トラブルなんだ。来てくれるのであれば、現地で説明する』

普段の態度からは考えられないほど焦った声に、頭が仕事モードに切り替わった。彼がここまで言うのだ、よほど困った事態が起きたのだろう。

「わかりました。すぐ、向かいますので場所を教えてください。何か必要なものはありますか？」

『いや、大丈夫だ。来てくれるだけで助かる。つと、すまん。人が来たから電話を切る。ついたら電話をくれ』

「あ、鳳さんっ」

まだ聞きたいことがあったのに、辰巳は電話を切ってしまった。スマホから無機質な音が響く。「場所おっ！」

燕はスマホを握りしめ、ふるふると身体を震わせる。

急いでいたのはわかるが、場所を知らなければ向かえない。

ムスッと唇を尖らせていると、辰巳からメールが届いた。有名なホテルの名前とそこまでの道のりが添付されている。

「どうやらここに来てほしいということのようだ。

そこなら、タクシーのほうが電車より早い。

「タクシー代、経費につけてやる」

燕はタクシーを捕まえようとして、止まった。

自分の格好を見て、一瞬悩む。

この格好は、燕のイメージではないし、仕事にふさわしいとは思えない。

けれど、辰巳の焦った声を思い出し、結局そのまま向かうことにする。

すぐに捕まえたタクシーの中で、ふと、似合わない格好だと辰巳に思われたくないな、とってしまった。

たどりついたホテルのエントランスで、燕は辰巳に電話をかけた。相手は待ち構えていたらしく、ツーコールほど繋がる。

「もしもし、鳳さん。エントランスにつきました」

『本当にありがとう。今向かうから、そこにいてくれ』

「わかりました」

電話を切った後、エントランスのソファに腰をかけて彼を待つ。

すぐに辰巳が小走りでこちらへ向かってきた。スーツ姿だが、走ったせいか髪の毛が乱れている。

「牧瀬」

燕を見て、どこかホツとしたような笑みを浮かべた。そんな表情は初めてで、燕の心臓が少しだけ跳ねる。急いで立ち上がると、すぐに辰巳が移動したのでその後についていく。

「すまない。こつちだ」

「はいっ、あの、スーツのほうがよかったですでしょうか？」

「いいや、理想通りだ」

燕はほっとして息を吐いた。

良かった、この格好でもいらしい。

それにしても、理想通りとはなかなか言葉だ。似合わないとか、柄じゃないとか思われるのを覚悟していたのに。

意思に反して火照^{ほて}ってくる頬をどうにか抑えようとしつつ、燕は辰巳に連れられ、地下に向かった。

結局、なんの説明もないまま高級そうな日本料理店に入り、奥の部屋の前に通される。

「すまないが、何も聞かず俺に話を合わせてくれ」

扉の前で辰巳が囁^{ささや}いた。

彼がどくどく説明しないのは、それほど切羽詰^{せつぱつ}まっているせいなのか、燕を秘書として信頼しているからか。

ぐるぐるとした頭を落ち着かせるため、燕は大きく息を吸い込んで一気に吐きだした。

「わかりました」

ここまでできたら、なるようにしかならない。

今まで副社長である辰巳をサポートしてきたのだから、彼の呼吸や間などはわかっている。

燕は何が起こつても動じない秘書の仮面を崩さないように、口の端を上げた。

辰巳が扉を開く。そこには五十代ぐらいの男女が二組と、振り袖を着た若くて可愛い女性が座っていた。

想像していた雰囲気とあまりにかけ離れていて、燕は一瞬、秘書の仮面を外しそうになる。慌てて、自分の手の甲を抓^{つか}ってなんとかこらえた。

ちらりと隣の辰巳に視線を送るが、彼は真っ直ぐ前を向いていてこちらに顔を向けない。

だが、これは誰がどう見てもお見合いの席ではないか。緊急トラブルというのは、まさかこのことだったのか。

仕事だと勝手に思い込んでいた自分も自分だが、やはり納得できないものを感じる。

(……鳳さん、だから説明をちゃんとしなかったんだな)

もし辰巳から事前に事情を聞いていれば、燕は絶対に断っていた。

彼にはお世話になっっているし助けたいとも思うが、プライベートにかかわる覚悟はない。

一歩でも踏み込んでしまったら、沼のようにずっぽりハマってしまいうでなんとなく怖いのだ。いつたいなぜ、そんなふうに思うのか、燕は気づきたくなかった。

もっとも、一度引き受けたことをなしにすることは自分の矜持^{きやうじ}が許さない。

内心のため息をついている燕をよそに、辰巳が彼女の肩を抱き寄せる。まるで、大切なものを守

るように、そつと。

途端、彼に触れられた肩が異常に熱くなる。すぐ近くに感じる辰巳の体温が燕の動悸を激しくしている。

「悪いが、この話はなかったことにしてほしい。俺には付き合っている女性がいる。今後、見合い話は持つてこないでくれ」

「なっ……！」

辰巳の言葉に、若い女性の隣に座っていた女性が不愉快そうな顔をしながら立ち上がる。それに構わず、辰巳は若い女性に頭を下げた。

「俺が両親にちゃんと伝えていなかったために、こんなことになってしまい、申し訳ございませんでした」

彼に釣られて、燕も一緒に頭を下げる。下げてから自分が謝る必要はなかったのでは、と気づいた。

だが、もし自分が本当に辰巳と付き合っていたなら、お見合い相手には申し訳なく思うだろう。「それでは失礼いたします」

もう一度頭を下げる辰巳に倣って同じようにし、彼に引つ張られるまま日本料理店を後にする。

辰巳の両親と思われる人たちは、一度、燕を見ただけで特に何か言うことはなかった。だからといって歓迎してはいないだろうが。

思いがけず辰巳のプライベードを覗いてしまった燕は、なぜか動悸を抑えられず、ただ彼につい

ていく。そして茫然と手を繋がれたまま、ホテルを出た。

少し落ち着いてくると、踵が痛いことに気づく。

「つつ……」

「すまん！ どこか痛いかな？ 手を強く握りすぎたか？」

痛みで息を吐くと、辰巳が慌てて握りしめていた手の力を緩めた。けれど、離そうとはしない。

「いえ、手は別に痛くないんですが、靴擦れを起こしてしまっただけ……」

辰巳の歩幅に無理して合わせていたせいかもしれない。

彼は眉間に皺を寄せた。燕に対して怒っているようにも見えるが、おそらく自分に腹を立てているのだろう。彼はそういう人だ。

「すぐに処置できるものを買ってくる」

「大丈夫ですよ。絆創膏持ってるので、貼っておけば問題ないです。ただ、どこか座れる場所があればいいんですが」

どうしようかと辺りを見渡すと、カラオケボックスが目についた。

「鳳さん、あそこに入りましょう」

人に聞かれず話ができるので、何が起きていたのか説明してもらおうにも丁度いい。

二人は、カラオケボックスに向かった。

指定された部屋で無言のまま飲み物が届くのを待つ。

飲み物が届き人心地つくと、さっそく燕は口を開いた。

「それで、説明してもらえますか？」

「……もちろんだ。けれど、その前に足の手当てを先にしないか？」

「手当ては後で大丈夫ですから、説明してください」

辰巳は手元にあるアイスコーヒーを一口飲み、ぼりぼりと自身の額を掻く。どう言葉にすればいいのか悩んでいるようだ。

しばらくすると、彼はくしゃりと前髪を握り、一度深く息を吐きだしてから話しだした。

「どう説明すればわかりやすいのか考えたんだがうまく纏まらん。……だが説明する。……牧瀬も気づいていたと思うが、今日のあれは、お見合いだ」

「そうでしょうね。可愛らしい女性がいらっしやいましたから」

燕がそう言うと、辰巳はなぜか嫌そうに顔をしかめた。

「俺は親が選んだ女性と結婚するつもりはない。だが、何度断っても、知らない間にお見合い話がまとめられる。強制的に参加させられた数は、両手で足りないほどだ」

「強制的に参加って、凄いですね……。そんなことができるんですか？」

「だいたい嘘をつかれてな。今日は親戚の集まりがあるから顔を見せろってことだったんだが……扉を開けた瞬間騙されたとわかって、踵を返した。それで、……牧瀬を呼んだ」

意に反するお見合いは確かに不愉快だろう。逃げたくなるのも理解はできる。

だが、なぜ自分を呼び出したのかわからない。

本当に付き合っている人がいないとしても、辰巳の相手として誰も文句をつけられないような、

可愛らしい人のほうが説得力があったのではないか。

「なんで、私だったんですか？ もっと他に適任者がいたと思えますが」

「……君しか思い浮かばなかった」

辰巳は、ぼそつと答える。

そんなふうに見えるのと悪い気はしない。

「牧瀬には、面倒くさいことに巻き込んで申し訳ないと思ってる。ただ、少しでも俺の嘘に付き合ってくれないか？ 俺たちが付き合っているとわかれば両親や親戚も、しばらくは諦めると思うんだ」

「しばらく……なんですな」

「そういう人たちだからな」

辰巳は視線を落として、コップに手をかける。

彼の実家の事情はよく知らないが、普通三十一歳という大人を騙してまで見合いさせるものだろうか。ただ、複雑な状況だということは理解できる。

けれど、軽率に彼の嘘に付き合いますとは言えなかった。

頼られると嫌とは言いがらいし、秘書としても彼を支えてあげたい。

とはいえ、これは燕には荷が重すぎる案件だ。

仕事ではなく、プライベートだし、そもそも自分では辰巳と恋人同士というのに無理がある。

黙っていると、辰巳は何かを思い出したように立ち上がった。

「すまん、忘れていた。ちょっと待っててくれ」
「へ？ は？」

急いで外に出ていく辰巳を見送った燕は、ため息を吐いた。

頭の中は混乱してぐちゃぐちゃになっている。

燕の心の整理がつかないうちに、辰巳は布を手にして戻ってきた。どうやら、その布を水で濡らしてきたらしい。

「それは？」

「傷口を一旦拭いたほうがいいと思ってな。絆創膏は持っているんだろう？ 出してくれ」

言われた通りに燕が絆創膏を出すと、辰巳が目の前に跪く。そして、そっと、燕の足に触れた。

「へ!? いいいいです！ 自分でやれます！」

「踵はやりにくいだろう。俺が君の歩幅を考慮しないで歩いたせいなんだ。これぐらいやらせてくれ」

焦った燕は、どうにか逃げだそうとしたのだが、しっかりと片足を捕まえられてしまう。

普段はそんなこと全く思わないというのに、彼に見られると思うと膝までのストッキングを穿いてきたことすら恥ずかしかった。

「だ、駄目です！ ほら、私ストッキングとか穿いてて、素足じゃっ」

口から飛びだした言葉は、最後まで紡ぐことができなかつた。

ワンピースの裾を少し捲り、彼は無言でストッキングをするすると脱がしたのだ。

「……っ」

ただ手当をしてくれるだけだと自分に言い聞かせても、なぜか燕は官能を覚えてしまう。

自分に触れる彼の手が色気を纏っているせいかもしれない。

するりと脱がされたストッキングは隣へ置かれ、辰巳の膝の上に足を乗せた格好になる。

ワンピースから下着が見えないか少し気になった。

下着の一枚や二枚見られたところでどうということはないが、辰巳に見られるかもしれないと思うとなぜか恥ずかしくなる。

真剣な顔で足を見ている辰巳から、燕は視線を逸らした。

早く終わらせてこの羞恥から逃げたい。

すると、ふいに、踵に湿った感触がある。

「……っ!？」

見ると、靴擦れができた踵を、辰巳がべろりと舐めていた。

彼はその後も、傷に丁寧な舌を這わせていく。

突然のことに頭がうまく働かず、燕は彼にされるがままになる。この状態がおかしいと判断できたのは、すっかり傷口全体を舐められてからだ。

辰巳は、舐め終わった踵を濡れた布で拭き、絆創膏を貼ってくれる。そして最後に甲に口付けを落とした。

その姿に、燕は見惚れてしまう。

だが、すぐに頭の中で警報が鳴った。この警報に従ったほうが、自分のためだ。

「鳳さん……」

燕が口を開きかけたとき、ブーブーとスマホの振動音が聞こえた。辰巳が胸ポケットからスマホを取り出す。

燕は電話に出ても構わないと、ジェスチャーで伝えた。彼が礼を言うように頷き、部屋を出ていく。

その背中を見て、燕はあらためて彼のかっこよさに気づいた。

そんな彼の隣に立つのが、身長も高く可愛げのない自分では、すぐに嘘だとばれてしまう。彼が戻ってきたら、きちんと自分には無理だと断ろう。

燕はストッキングを穿き直し、足の甲に掌を置いた。いまだにそこが熱を持ったように熱い。

そっと一度撫でてからパンプスを履く。

少し待っていると、辰巳が戻ってきた。机の上に置いてあった伝票を手にとり、部屋を出てこうとする。

「すまん。すぐに行かないといけなくなった。出られるか？」

「え、あ、はいっ」

燕は慌てて鞆を取り、彼の後を追う。

「鳳さん、カラオケ代——」

「奢りだ。これぐらいさせてくれ、休みの日にこんなことで呼びだしてしまったんだから」

「それは別にいいんですけども……」

辰巳は通りまで出て、タクシーを捕まえる。彼が使うのだろうと思っていたのに、止まったタクシーに燕を先に乗せようとした。

「あの？」

「いいから、乗って」

「はいっ」

思わず返事をしてしまいがちながら、燕は車に乗り込み、奥へとずれる。けれど、辰巳が乗ってくる気配はない。

「牧瀬、家ほどのへんだ？」

「え、っと……」

問われたことに答えると、辰巳が運転手に向かって「彼女をそこまで乗せてってくれ」と伝えた。「私、電車で帰れますよ」

「足を痛めてるだろ。無理をするな。帰って安静にしてくれ。それと、さっきのことだけど、考えておいてくれると嬉しい。今日は本当に助かった。ありがとう」

否と言わせない態度で運転手に一万円を差しだして扉を閉める。

タクシーがゆっくりと発車したので、仕方なく燕はシートに深く座った。

結局、断れないままになってしまった。

通り過ぎていく街並みを眺めながら、燕は辰巳のことを考える。

先週、彼が話そうとしていたのはこのことだったのだろうか。道理で歯切れが悪いはずだ。もともと彼は人にうまく頼れないタイプの人間だ。そんな彼が自分に頼んできたということは、それだけ切羽詰まった状態なのだろう。

本当に断っていいのだろうか。
断って後悔しないだろうか。

逆に受けて後悔しないだろうか。

あんなことを承知しても、上手くいくとは思えないけれど、断った場合、辰巳はどうするのだろうかと心配になる。

いくら考えてみても、結論は出ない。

ただ、彼が自分を見たときのホッとした顔が頭から離れなかった。

第二章 霞に千鳥

辰巳の見合いから二日後の月曜日、燕は体調を崩し会社を休んでしまった。

あの日は帰宅後も、ずっと辰巳のことを考えていたのだ。

読みかけだった小説もほったらかしにし、食事もほとんど取っていない。それほどまでに、頭の中が辰巳一色だった。

考えて、考えて、考えすぎた結果の熱だ。

まさかこんなことで熱を出すとは思わなかったし、会社を休むほどだとも思わなかった。自分のメンタルの弱さにびっくりする。

自分には務まらないので断ろうと何度も決意したはずなのに、なぜ体調を崩すのか。

それは、心のどこかで、断ることを躊躇っているからだとわかっている。

燕はベッドの上でぐったりとしながら一日を過ごす。スマホを手にとって、写真フォルダを開いた。日付を遡って、昨年末の会社の飲み会の写真を出す。

それは加里が撮った辰巳と燕の写真だ。

辰巳の隣に燕が座り、話をしている。

基本スマホで撮った写真はパソコンに保存して消すようにしているのだが、この写真はなぜか消

すことができないでいた。

「どうすればいいのやら……」

何度考えても結局答えは一つだった。

燕は彼の提案を断ろうと数十回も繰り返している決心を、もう一度した。

翌日の朝、体調がそこそこ回復した燕は、出社した。

けれど、なぜだか他の社員が自分をチラチラと見ていることに気がつく。一日休んだ程度で、それほどみんなに迷惑をかけてはいないはずなのに、おかしい。

「何……？ イジメみたいなこの雰囲気」

そんなわけはないとわかっているが、嫌な気持ち胸の中に広まっていく。

不思議に思いながらデスクにつくと、加里が近寄ってきた。燕は彼女に事情を聞くことにする。

「加里、おはよう」

「おはよう。体調大丈夫？」

「うん。全回復してわけじゃないけど、もう大丈夫だよ。ところで、何、この雰囲気？」

そう聞くと、加里はからかうような表情になる。

「あかさ、単刀直入に聞くけど、燕ってばいつから鳳さんと付き合ってたの？」

「は……い？」

「この間はぐらかしたのは、鳳さんに口止めされてたとか？ それならしょうがないけど、言っ

くれたらよかったのにー」

屈託のない笑みを浮かべている加里を、燕は茫然と見つめてしまう。

いったい何がどうなってそんな話になったのか。

まさか、辰巳自身が話したとか。あまり考えられないことではあるが、それしか思いつかない。

「ごめん、その話は後で」

「はいよー」

加里に断って、燕は辰巳のそばへ寄る。声を少し荒らげそうになるのを我慢して、冷静さを装う。

「鳳さん」

「牧瀬、体調はいいのか？」

「はい、もうすっかり」

「そうか。……ちよつと、いいか？」

燕がこの事態の原因を聞く前に、辰巳が視線で会議室へ促してきた。まだ就業時間前なので席を外しても問題はない。

「私も少し話したいです」

会議室に入ると、燕はさっそく切りだす。

「鳳さん……あの——」

すると突然、扉が開き、社長の森田が会議室に入ってきた。

「あ、こんなところにいたー。しかも、ちよつとよく二人で！」

「社長」

森田が悪戯いたずらつ子のような、それはもう楽しそうな笑みを浮かべている。これがうちの社長なのかと少し呆れもするが、仕事には大胆で鋭い人であることを燕は知っていた。

それはともかく、森田はにこにこ二人に話しかける。

「もー、こんなところで早々と密会なんかしてー」

「密会……って、何をおっしゃってるんですか」

「いやいや、いいのわかってるから。にしても、ちゃんとやっておいてくれればお祝いしたのに、二人共水くさいんだからさー」

燕は眉間まゆげんに皺しわを寄せた。辰巳に視線を向けると、彼も眉をひそめて困った顔をしている。

けれど、森田はなおも言葉を続けた。

「二人が本当に付き合ってるなんて知らなかったからさあ。この間、告白とかがって煽あほっちゃって、ごめんね。いや、でも、お似合いだよ！二人が一緒に立っていると、凄すごくしっくりくるっていうか自然というか、これが当たり前って感じな部分があったからさ」

「社長、なんの話を……」

「なんのって、もうしらはつくれなくてもいいじゃない。この間、二人が手を繋いで歩いているの俺、見ちゃったからさー。もうびっくりしちゃったよ。岩瀬ちゃんなら何か知ってるかなって聞いても、彼女も知らなかったって言うし。二人共隠すのうまいよねー」

森田の言葉を聞いて、燕は理解した。

今日の社内の雰囲気——それは森田のせいだ。

止まらない森田の話に、辰巳が割って入る。

「森田さん、牧瀬と二人で話したいんで少し席を外してもらっていいですか」

「えー、つまらないな。ま、いいか。とりあえずこれ渡しておくね。行ったら感想よろしく。あ、キスマでは許すけど、それ以上は会社じゃ駄目だからね」

なおも話したような態度で何かを手渡す森田に、辰巳が声を荒らげる。

「するわけないだろ！ 怒るぞ！」

「辰巳が怒ったー」

彼が怒鳴る声など聞いたことがなかった燕は固まる。それをよそに、森田は平気な顔でゆうゆうと会議室を出ていった。

途端に会議室は静かになる。

「えーっと、結局どうなってるんですか」

「すまん。この間、俺たちが一緒にいるところを森田さんが見たらしくくてな。俺たちが付き合っているんだと勘違いして、岩瀬や他の社員に確認して回ったようで……」

そうやって、社員全員に話が広まったということか。

「……こんなことになって大変申し訳ないと思ってる。だが、この間のこと、どうしても頼みたい。牧瀬しかいないんだ」

辰巳が頭を下げた。

「頼む。牧瀬が負担に思うようなことがないように努めるし、俺ができることはやるつもりだ」
頭を上げ、燕の手を取って顔を近づけてくる。

間近に迫った真剣な顔を見て、燕は口から拒絶の言葉を出せなくなった。
本来頼られることに慣れている燕だ。頭を下げられて断れるわけがない。

それに、こんなに社内で噂になってしまうと、別の人に頼むというのは難しいだろう。

「……っ、こうなってしまうたら断れないじゃないですか」

燕はため息まじりに答えた。

不可抗力とはいえ、外堀を埋められてしまった感覚だ。

ただ、最悪だと思ふと同時に、これで言い訳ができるとも思っている自分にも気がつく。

断れない状況に陥おとってしまったから、自分の意思とは関係なく彼の恋人のふりをする——そんな卑怯な考えを頭から追い払うように、燕は首を振った。

憧れていたのは鴨井であつて、辰巳ではない。分不相応に彼を気にしたことなどない、と自分に言いきかせる。

けれど今も、頭の中の警報は鳴り響いていた。

そんな燕の手を辰巳が両手で包む。

「ありがとう、牧瀬」

その柔らかい笑みを見て、燕は頭の中の警報の電源を自ら落とした。

「それで、私はどうすればいいんですか？」

「今日の夜は空いているか？」

「空いてますけど……」

それがなんの関係があるのかと、首を軽く傾げる。

「なら、今日の夜、俺に時間をくれ。今後についての打ち合わせがしたい」

「……打ち合わせ？」

彼の恋人のふりをするというだけで、それほど話し合う必要があるのだろうか。

だが、彼と釣り合わない自分には、覚えておかなければいけないことが確かにあるかもしれない。

「わかりました。定時であるので、その後でいいですか？」

そう答えると、辰巳は微妙な顔をした。

その反応で、定時は厳しいのだということがわかる。

けれど、普段から辰巳は仕事をしすぎだ。その上、燕もあまり遅くなるのは嫌だったりする。

「ワーカーホリックは駄目ですよ」

「そうだな。わかった」

腕を組んでじっと見つめると、辰巳は息をぐっと呑み込んで頷いてみせた。

こうして燕は、辰巳の恋人のふりをする事となった。

自分には荷が重いし、すぐにこの嘘がバレることもわかっているが、真面目で不器用な辰巳をできるだけ助けようと決める。

燕は仕事をさっさか終わらせ、宣言通り定時にあがる算段をつけた。

辰巳も定時を少し過ぎたところに会社を出るといふ。二人は彼がよく行くというお店の前で待ち合わせをした。

燕は地図を頼りに、住宅街の中にあるその店を見つける。シンプルな暖簾がかかった店の中から、外にまで賑わいが漏れてきていた。

さほど待たずに、辰巳が現れる。

「牧瀬、待たせたか？」

「いえ、今、ついたところなので」

「入るか」

「はい」

暖簾をくぐると、エプロン姿の女性が一人立っている。年は燕の母親ぐらいだ。彼女は辰巳の姿を見て、穏やかに「いらっしやい」と笑った。

「鳳さん、珍しいわねえ、女の子を連れてくるなんて」

「まあ、ちよつと」

「そうなの。鳳さんのいい人つてことね。おばちゃんは嬉しいわ」

困ったように辰巳も笑う。

その自然な表情に、燕は、ここが彼にとって安らげる場所なのだとわかった。

カウンターの隅に隣同士で座ると、その女性——女将がおしぼりを差しだしてくる。

「いつもみたいに適当に出しちゃっていいのかしら？ お嬢さん何か食べたいもの、嫌いなものはある？」

そう問われた燕は、慌てて目の前にあるメニュー表と壁に貼つてある紙を眺めた。どれも美味しそうだ。

「あさりの酒蒸しが食べたいです。他にも何かおすすめを二、三品。嫌いなものは特にないのでなんでも大丈夫です」

「遠慮しないでいいのよ？ 鳳さんなんかトマト嫌いだからトマト系のは出さないでくれーとか言うんだから」

「女将さんっ」

辰巳が素の顔で焦る。

仕事をしているとき以外の彼のことを、燕はほとんど知らなかった。確かに辰巳の言う通り話し合いが必要かもしれない。

「鳳さんはいつものハイボール？」

「いや、お茶を二つ」

「お嬢さんもお茶でいいの？」

「はい、お茶でお願いします」

これは重要な打ち合わせなのだから、それが終わるまではお酒を飲むわけにはいかない。

女将が奥に引つ込むと同時に、燕は視線を辰巳へ向けた。けれど、なんと切りだしてよいかわか

らず、代わりに別のことを聞く。

「トマト、嫌いなんです」

「どうもあの皮の部分が嫌なんだ。あと、中身」

「それトマト全部つてことじゃないですか。つてことは、トマトソースも駄目なんです？」

「ソースは食べられないわけではないが、好んで食べない」

「大人になると我慢して食べることもできますもんね。ただ好き好んで食べないってだけで」

「子どものころのほうが素直に残せたな」

二人で小さく笑い合い、届いたお茶で軽く乾杯した。

「さて、今回の事案についてなんだが、最低でも人に話せる馴れそめは用意しておきたい」

すぐに辰巳が切りだした。仕事のような口調だが、それが燕にはありがたい。

「馴れそめ、ですか」

「ああ。誰かに尋ねられたときに、二人で別々のことを言わないようにしたいんだ」

「わかりました」

「俺たちの雰囲気では、付き合って数ヶ月経っているというのは難しいだろう。一ヶ月ほど前からというのが妥当だな。会社の人間に黙っていたのは、森田さんの耳に入れば面倒くさいから、俺が口止めをしたということに」

「まあ、確かに。社長、凄かったですからね」

燕は今日の森田の様子を思い出し、答えた。

「告白は俺から——」

そこで、言葉を切った辰巳は、真剣な表情で燕を見つめる。

「牧瀬が入社した当初から、俺は密かに想いを寄せていたが、ずっと黙っていた。けれど先日やつとその想いを告げ、君は戸惑いながらも受け入れてくれた」

燕は視線を天井に向ける。淡々とした口調だが、結構恥ずかしい台詞だ。

それなのに辰巳はなんとも思っていないのか言葉を続ける。

「俺はあまり言葉にするのが得意ではないが、君にだけは伝えられる。君と一緒にいると落ち着くし、幸せを感じるんだ……」

彼は、少しだけ目尻を下げて言った。

まるで本当にそう思っているかのような雰囲気、燕の身体は一気に熱くなる。

「ちよ、ちよっと待ってくださいっ」

「どうした？」

「そ、その馴れそめ、お、鳳さんが積極的すぎませんか？」

「そうか？ 普通だと思うが……」

辰巳は不思議そうな顔をした。つまり、彼にとつてはこれが普通なのだろう。

「何か劇的なエピソードがあれば取り入れたいところだが、ないほうが逆にらしいと思うんだ」

「そう、ですね。確かに私と鳳さんの性格を考えると、特に盛り上がりのある事件はないほうが真実味があるように思えます」

燕は軽く深呼吸して、振り回されつばなしの頭に冷静さを取り戻した。これは偽恋人の話であって、本当ではない。やるからには徹底的にやらねば、簡単にボロが出てしまう。

気持ち切り替え、辰巳の話を手帳にメモしていく。もちろん誰かに見られたとしても仕事の内容だとしかわからないように工夫する。

さらに最低限のことをいくつか決め、それ以外は適当に誤魔化して話した後、互いに報告をすることにした。

それが終わると、辰巳がふうと息を吐きながら切りだした。

「それと、一つ頼みがあるんだ」

「なんですか？　ここまで来たらなんでもどうぞって感じですよ」

「俺と一緒にパーティーに参加してほしい」

「パーティー？」

「ああ、会社関係だけではなく、俺個人が招かれているものもだ」

「秘書……として、ではないですよね。もちろん」

辰巳個人のものとはどういうことだと気にはなるが、燕は軽く頷く。

「そうだ。ドレス代や必要なものは俺に請求してくれ」

辰巳はそう続けた。

けれど燕は、自分のものは自分で支払う主義だ。仕事に関係ない出費が続くのであれば考えるが、

こちらに関しては簡単に頷けるものではない。

「承知しました。とりあえず、それなりのドレスは持ってますから大丈夫です」

「わかった。何かあれば遠慮なく言っしてほしい」

「ありがとうございます」

燕は小さく頭を下げた。

「まずは、再来週の土曜日にある会社関係のパーティーだな」

「ああ、大手企業の社長の婚約パーティーがありましたね。お相手が一般人だと、週刊誌が騒いできました」

「芸能人でもないのにな」

「あの社長は若い上に顔が整ってますからね。ファンが多いみたいですよ。あのパーティーに出席すればいいんですね？」

細々とパーティーについて打ち合わせしながら二人は食事をして、夜の八時過ぎに解散した。

自宅に戻った燕は、早速クローゼットの中からパーティーに着ていけそうなドレスを引っ張り出す。淡いグリーン色で襟と袖がレースになっているミディアムドレスは、二年ほど前に一目惚れして購入したものだ。

自分が着るには可愛すぎる気がして一度も袖を通したことがなかったそのドレスを、思い切っって選んでみる。